

# 琉球大学学術リポジトリ

## 幼児の「約束」理解の発達

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 真喜子, 嘉数, 朝子, Kakazu, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8148">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8148</a>

## 幼児の「約束」理解の発達

上里 真喜子 嘉数 朝子\*

(1995年8月31日受理)

円滑な対人関係を営むには、他者の立場を理解することは重要である。幼児は、社会生活の中で、例えば保育場面や遊び場面を通して、それらを学んでいく。子どもがどのくらい他者の心的状態を理解しているかは「心の理論」という領域の研究で検討されてきた。本研究では幼児を対象として、他者の意図を表す「約束する」ことについて焦点をあて、幼児が大人と同じように約束を理解しているか否か検討することを目的とした。その結果、幼児は大人と同じように約束を捉えていることが明らかとなった。年長児、年中児は、「約束する」ことを単なる規則やきまりとして捉えているのではなく、他者との関係において捉えているようである。つまり、「約束する」という心的動詞には、他者の望みが含まれていることを予測できるようである。

### 問題と目的

幼児は、他者との関わりを通して、他者が自分とは異なる考えをもっていることを知るようになる。それは、他者と生活していく上で不可欠であり、保育場面においても、他者の心情や意図に気づかせる援助も行われている。幼児がどのくらい他者の意図や信念などの心的状態(mental state)を理解しているかについては、最近、「心の理論」(theory of mind)と呼ばれる研究分野において検討されるようになってきた(Astington & Gopnik, 1991)。ここでは、子どもが他者の行動から他者の心的状態を予測できるか否かについて検討し、かなり年少の段階から他者の心的状態を理解できることが示されている。

「心の理論」についてはさまざまな主張があるが、玉瀬(1994)は、幼児における心的理解に関する研究を、1) 心的世界の存在についての理解、2) 結果としての心的状態の理解、3) 原因としての心的状態の理解、の3つに分けて

いる。このうち、ある状況の結果としての心的状態の理解のための研究として心的動詞(mental verbs)に関する研究をあげている。心的動詞の使用に関する研究では、他者の考え、知識、記憶などについて述べたと判定されるような心的動詞の使用は、2歳後半から3歳頃からみられるようになることが報告されている(Bretherton & Beeghly, 1982; Shatz, et al, 1983)。しかし、幼児の心的動詞の使用と理解については、まだ十分に検討されていない。これまで主張や要求などの心的状態を表す心的動詞の使用と理解については、主に成人を対象として検討されてきた(仲・無藤, 1983; 仲・無藤・藤谷, 1982; 石川・無藤, 1990; 岡本, 1991)。

本研究では、幼児を対象として、この心的動詞の一つである「約束」に焦点を当てる。約束は日常生活において頻繁に行われる行為であり、子どもは「約束したのに」と他者を責めることがあるので、幼児にとって身近な題材であると思われる。また、年少児を対象とするジレンマ課題として、「約束を守ること」が題材として

\* 琉球大学教育学部 教育心理学科

取り上げられていることから (Selman, 1976)、幼児にも理解できる題材であることがわかる。さらに、心理学においては、対人関係における信頼に関わる要因の一つとして約束が取り上げられてきた (Rempel, Holmes, & Zanna, 1985; Schlenker, Helm&Tedeschi, 1973; Rotenberg & Pilipenko, 1984)。そして、幼児は約束すると言った相手が約束を守ったか否かによって、相手を信頼できるか否かを判断することが明らかになっている (Rotenberg, 1980)。従って、約束は幼児期の信頼関係にも影響を及ぼし、非常に重要な課題であると思われる。

「約束する」という動詞の産出に関しては、commisive speech actの研究において、5歳児は状況に適切な発話行為を生産する能力を持っているが、「約束する」という心的動詞を使用することに気づくまでには至っていないことが示されている (Astington, 1988a)。例えば、相手の子がボールを持ってきて欲しいと望んでいて、自分がボールを貸してあげるという場合に、本当にもっていくかどうかはどうしたらわかるかと尋ねられると、「約束する」と同じ内容 (絶対持ってくる) を表す言葉で答えることができる。しかし、適切な文脈で心的動詞を使用できることから、年少児が心的状態の存在について気づいていることは考えられても、心的動詞の因果的性質を十分に理解しているか否かは明らかではない。つまり、文章にあわせて心的動詞を理解していたとしても、それはふるまいとしての理解、実用的レベルの理解であって、年少児が心的動詞の意味を十分に理解しているかは明かではない (丸野, 1991; Robinson, Goelman & Olson, 1983)。年少児が心的動詞の意味を理解しているか否かを知るためには、どのような場合に約束が成立するのかを理解しているか否かという問題と関連があるであろう。

その約束が成立するための条件について Searle (1969) は、以下のように呈示している。彼は、成人を対象にして「話し手が聞き手に〇〇することを約束する」という事態において、それが約束として成立するために必要な条件を揭示し

た。そして、約束が成立するためには、①(a)話し手は約束した内容を実行することができる、(b)話し手は聞き手が望むことを約束する、②話し手は約束した内容を実行する意図がある、③話し手は将来話し手が約束した内容を実行することを述べる、④話し手は約束した内容を実行する義務を負う、の4つの規則が必要であると述べている。

このうち規則①(a)については、5歳児ではこの規則を明確にもちあわせていないことが示されている (Astington, 1988b)。規則②については、9歳児でも理解していない (Olson & Astington, 1986) という見解と、5, 6歳児ですでに理解している (鈴木, 1993) という見解があり、一致した結果はでていない。規則④については5歳児でも理解していることが示されている (鈴木, 1994)。

このように、これまで、話し手側の自己に対する認知について検討されてきた。しかし、約束というものは二者で取り交わすものであることを考慮すると、話し手の聞き手に対する認知、つまり話し手は聞き手が望むことを約束するという規則①(b)を理解しているか否かについて検討する必要がある。成人はこの規則①(b)を理解している (Gibbs & Delaney, 1987)。しかし、子どもがこの規則を理解しているか否かについては明らかにはなっていない。従って、本研究では「話し手は聞き手が望むことを約束する」という規則①(b)を取り上げ、これを幼児が理解しているか否か検討することを目的とする。

#### 実験1：約束内容が相手の望むものではないことが事前に判っている場合

##### 【目的】

幼児は、「話し手は聞き手が望むことを約束する」という Searle の規則①(b)を理解しているか否かについて検討することを目的とする。本研究においては、第三者同士が約束する物語を作成し、「聞き手が望んでいる」、「聞き手が望んでいない」、「聞き手についての情報がな

い」, という3つの条件を設定し, 条件によって遂行判断に違いがみられるか否かを検討することを目的とする。

仮説: 1) 年長児も年中児も「聞き手が望んでいる」「聞き手についての情報がない」という条件において, 「守った方がよかった」と判断するであろう。2) 年長児は「聞き手が望んでいない」という条件において「守らなかった方がよかった」と判断するであろう。

### 【方法】

**被験児** 年長児20人(平均年齢6歳3ヶ月)および年中児20人(平均年齢5歳3ヶ月)年少児20人(平均年齢4歳3ヶ月)。各学年とも男女は半数ずつであった。

**材料:** 動物(犬, 猫, うさぎ), 遊具(自転車, なわとび, 竹馬), お菓子(キャラメル, ガム, あめ玉)についての短い話からなる9種類の題材(男児用, 女児用)の描かれている紙芝居と, 9種類の絵が描かれている絵カードを用いた。  
**手続き:** 課題に入る前に, 約束内容が極端に幼児の興味を引くものであるのを避けるために, 動物, 遊具, お菓子の描かれた絵カードの中から, それぞれ好きな物1つとあまり好きでない物1つを選択させた。そして, 被験児が選択しなかった絵についての約束に関する物語(Table 1参照)を, 絵を呈示しながら読み上げた。一人の被験児につき物語を3つ提示したが, それぞれ「聞き手が望んでいる」「聞き手が望んでいない」「聞き手についての情報がない」のいずれかの条件と対応するものであった。物語を聞かせた後, 被験児が課題の内容を理解しているか否か確認の質問をした。正確に答えられなかった場合には, 3回まで繰り返して尋ね, 3回まで繰り返して尋ねても正しく答えられなかった場合には分析の対象としなかった。その後, 遂行判断について査定するために「ケンちゃんはこの約束を守った方がよかったと思う?それとも守らなかった方がよかったと思う?」と尋ね, それぞれの回答に対し「絶対そうした方がいい」「たぶんそうした方がいい」の2件法で

回答させた。得点は「絶対守った方がよかった」を1点とし, 「絶対守らなかった方がよかった」を4点とする4段階評定とした。次に, 判断理由について「どうしてそう思ったの?」と尋ね, 自由回答させた。最後に「ケンちゃんが約束したのは本当の約束だったのかな?それとも変な約束だったのかな?」と尋ね, 2件法で回答させた。なお, 守った方がよかった, 守らなかった方がよかったという質問の順序, および, 本当の約束, 変な約束の質問の順序はカウンターバランスした。また, 物語と条件の組み合わせ, および条件の提示順序もカウンターバランスした。

Table 1 場面構成の内容(例)

---

Aくんの家で犬が生まれた→それを聞いたBくんは(望んでいる(犬好き);望んでいない(犬嫌い);情報なし)と述べる→AくんはBくんに「犬をあげるね約束するよ」と言う。

---

### 【結果および考察】

年長児, 年中児は全員が課題の内容, 設問を理解していたが, 年少児は約半数が課題を理解していなかったため, 分析の対象としなかった。相手が望んでいないものは約束ではないことを理解しているか否かを査定するために「その約束を守った方がよかったと思うか否か」という質問に対する主人公の遂行判断と, 「本当の約束だったのかな」という質問に対する判断について検討した。

1) 遂行判断「絶対守った方がよかった」と思うを1点, 「絶対守らなかった方がよかった」と思うを4点として, 各条件における平均値と標準偏差を求めた。それらの得点を平均得点とし, 年齢, 条件によって遂行判断の得点に違いがみられるか否かを検討するために, 2(年齢: 年中児, 年長児)×3(相手が望んでいる, 望んでいない, 情報なし)の分散分析を行った(Figure 1を参照)。

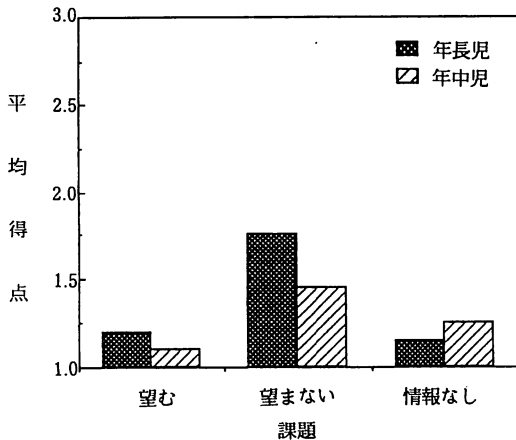


Figure 1 各課題における得点の平均値 (実験1)

その結果、条件の主効果 ( $F(2.38) = 5.43$ ,  $p < .01$ ) が有意であった。つまり、年長児、年中児のどちらにおいても、「聞き手が約束内容を望んでいない」という情報を与えられた場合の方が、「聞き手が望んでいる」場合や「聞き手についての情報がない」場合よりも、約束を守らなかった方がよかったと考えていることが示唆された ( $t = 3.02$   $df = 76$ ,  $p < .01$ ;  $t = 2.66$   $df = 76$ ,  $p < .01$ )。

2) 次に、変な約束か、本当の約束か否かを尋ねたところ、年長児の10人中7人、年中児の10人中10人は、聞き手が望まない場合に取り交わした約束も、本当の約束であると答えた。

以上の結果から、年長児と年中児は、聞き手が望んでいないのに約束した場合でも守った方がよいと考え、本当の約束であると考えていることが示された。このことは幼児は「約束するね」と言ったものは約束であると捉える (Astington, 1988a), という結果と一致するものである。しかし、条件ごとの遂行判断を比較すると、聞き手が約束内容を望んでいないのに約束した場合には、聞き手が望んでいる場合や聞き手についての情報がない場合よりも守らなくてもよいと考えていることが示された。このことより、年長児も年中児も「聞き手が約束内容を望んでいない」という情報を考慮していることが予想される。それにも関わらず年長児、

年中児が守った方がよいと判断した理由がいくつか考えられる。1つは、「約束するね」という言葉が最後につけられていたために守った方がよいと判断したかもしれないことである。なぜならAstington (1988a) の研究において「約束する」と文末につけたものは、すべて約束であると答えることが示されているからである。また、「約束するね」という言葉が被験児にとって時間的に最も新しい情報であり、この新しい情報によって課題文に対する最終判断がなされたとも解釈できる。さらに、文章の整合性の吟味について検討した研究において、2つの矛盾する内容が一篇文章の中に示されている場合と、別々に示されている場合では、別々に示されている場合の方が予測-検証しやすく、整合性について吟味しやすいことが明らかになっている (鈴木, 1987)。実験1では、「約束するね」ということと、「聞き手が望んでいない」という情報が一文中に示されていたため、両方の情報を関連づけて検討することが難しかったことが予想される。このことについて実験2で検討していく。

#### 実験2：約束内容が相手の望むものでないことが提示される場合

##### 【目的】

実験1では、年長児、年中児とも聞き手が約束内容を望んでいない場合でも、守った方がよいと判断する割合が高かった。その理由として、第1に、「約束するね」という情報が一番最後に提示されたこと、第2に、一文章中に矛盾する情報が隠されていたために、「約束するね」という情報と「聞き手が望んでいない」という情報を関連づけて考慮することが難しかった、ということが予想される。そこで、本実験では、約束を取り交わした後に聞き手がその約束内容を望んでいなかったという情報が与えられる場合を設定し、幼児がどのように判断するか検討する。本実験が実験1と異なる点は、一番新しい情報は「聞き手が望んでいない」という情報

である点と、「約束をした」という情報と「聞き手は望んでいない」という2つの情報が、別々に呈示されているという点である。

仮説：1) 年長児は「聞き手が約束内容を望んでいない」場合には「守らなくてもよい」と判断するであろう。2) 相手の好みについての情報を明確に呈示することにより、約束履行と相手の好みについて考慮した反応が増加するであろう。

### 【方法】

被験児：年長児20人（平均年齢6歳3ヶ月）、年中児20人（平均年齢5歳3ヶ月）。各学年とも男女は半数ずつであった。

手続き：物語を聞かせるところまでは、実験1と同様である。物語（Table 2 参照）を聞かせた後、課題理解について確認し、以下の質問を行った。まず、遂行判断について査定するために「ケンちゃんはこの約束を守った方がいいと思う、それとも守らなくてもいいと思う」と尋ね、それぞれの回答に対し、「絶対そう思う」「たぶんそう思う」の2件法で回答させた。最後に「どうしてそう思ったの?」と尋ね、その判断理由について自由回答させた。

Table 2 場面構成の内容(例)

Aくんは、犬を飼っていて、子犬が生まれたので、Bくんに「犬をあげるね、約束するね」と言う→その後、AくんはBくんがその約束内容を（望んでいる（犬好き）：望んでいない（犬が嫌い）：情報なし）ことを知る。

### 【結果および考察】

遂行判断 実験1と同様に、「絶対守った方がよかった」を1点、「絶対守らなくてもよかった」を4点として、各条件ごとに平均値、標準偏差を算出した。それらの得点を平均得点とし、年齢、条件によって遂行判断に差がみられるか否か検討するために、2（年齢：年長児・年中

児）×3（条件：相手が望む・望まない・情報なし）の2要因の分散分析を行った（Figure 2を参照）。

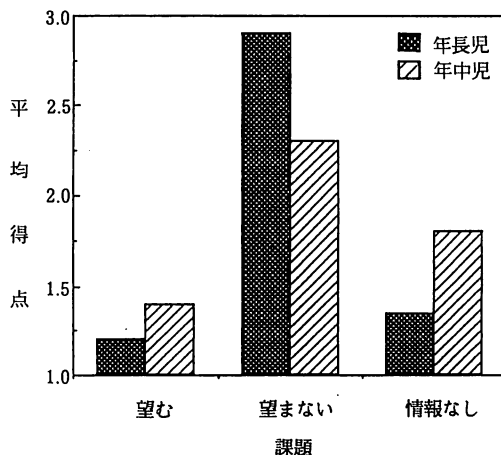


Figure 2 各課題における得点の平均値 (実験2)

その結果、条件の主効果がみられた ( $F(2,38) = 27.92, p < .001$ )。また、年齢と課題との間に交互作用がみられた ( $F(2,38) = 3.00, p < .05$ )。Ryan法による下位検定の結果、年長児においては聞き手が望んでいない場合の得点が、聞き手が望んでいる場合や聞き手についての情報がない場合よりも有意に高かった ( $t = 6.55, df = 76, p < .001$ ;  $t = 5.97, df = 76, p < .001$ )。これは、聞き手が望んでいない場合の方が、聞き手が望んでいる場合や、聞き手についての情報がない場合よりも、守らなくてもよいと考えていることを示唆している。年中児においては、聞き手が望んでいない場合の方が、聞き手が望んでいる場合よりも有意に高かった ( $t = 3.47, df = 76, p < .05$ )。これは、聞き手が望んでいない場合の方が、聞き手が望んでいる場合よりも、守らなくてもよいと考えていることを示している。また、聞き手が望まない場合には約束を守らなくてもよいと答えた人数は、年長児20人中12人、年中児20人中6人であった。

以上の結果より、聞き手についての情報がはつきり呈示された場合には、年長児、年中児ともに「聞き手が約束内容を望んでいない」場合に

は守らなくてもよいと判断することが示された。このことは、聞き手についての情報と「約束する」という情報を比較して判断しやすかったと考えられる。

### 総合的考察

本研究では、Searle (1969) の提示した規則①(b)の「話し手は聞き手が望むことを約束する」を取り上げ、幼児を対象にしてその規則を理解しているか否か検討することを目的とした。実験1、実験2を通して、年長児、年中児ともに聞き手が約束内容が実行されることを望んでいる場合には話し手は約束を守ったほうがいいと答えたことより、約束は守るべきであるという観念があることが示された。それに対し、聞き手が約束内容を望んでいないという情報を与えられた場合には、「約束を守る」ということと比較して判断することが示された。また、それは「約束を守る」ということと、「聞き手が望んでいない」という情報がはっきり提示された場合により顕著になることが明らかになった。

約束における他者の好みについて考慮できるということは、他者の立場に立って考える能力が必要になるであろう。この役割取得能力と、それに影響する社会的経験の検討に関する研究において、幼稚園児では仲間との接触は、自分とは異なる他者の存在に気づかされる機会の多い子はそうでない子に比べて、より自分と他者の視点を区別して捉えることができることが示唆されている(山岸, 1980)。従って、「約束」における他者の好みの理解も、対人関係における相互作用によって理解されていくと考えられ、友だちと約束する機会を多くすることで、より約束について理解されていくことが予想される。実験1で年少児が約束について理解できなかったのは、年中児や年長児に比べて他者と約束を取り交わす機会が少ないからであろう。

また、「なぜ守った方がいいのか」という問いに対し、「けんかになるから」と答えた子がいた。これは、約束が信頼関係に関わるものであることに気づきはじめていることを示唆して

いるであろう。本研究の結果から、幼児は大人と同じように約束を捉えていることが明らかになった。近年、心の理論における研究で、年少の子どもでも他者の意図や願望、信念を理解していることが明らかにされているが、本研究で得られた結果も同様のものである。幼児は成人と同じように約束を捉えているようである。年長児、年中児は、「約束する」ことを単なる規則やきまりとして捉えているのではなく、他者との関係において捉えているようである。つまり、「約束する」という心的動詞には、他者の望みが含まれていることを予測できるようである。

### 引用文献

- Astington, J.W. 1988a Children's production of commissive speech acts. *Journal of child language*, 15, 411-423.
- Astington, J.W. 1988b Children's understanding of the speech act of promising. *Journal of child language*, 15, 157-173.
- Astington, J. W., & Gopnik, A. 1991 Theoretical explanation's understanding of children's understanding of the mind. *British Journal of developmental psychology*, 9, 7-31.
- Bretherton, I., & Beehly, M. 1982 Talking about internal states: the acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental psychology*, 18, 906-921.
- Gibbs, R.W., & Delaney, S, M. 1987 Pragmatic factors in making and understanding promises. *Discourse Processes*, 10, 107-126.
- 石川有紀子・無藤 隆 1990 要求表現の文脈依存性 その規定因としての役割関係 教育心理学研究, 38, 9-16.
- 丸野俊一 1991 心の働きについての理論 丸野俊一編「新・児童心理学講座」 5巻 259-215. 金子書房
- 仲 真紀子・無藤 隆 1983 間接的要求の理

- 解における文脈の効果 教育心理学研究, 31, 195-202.
- 仲 真紀子・無藤 隆・藤谷玲子 1982 間接的要求の理解に関わる要因 教育心理学研究, 30, 11-20.
- 岡本真一郎 1991 要求発話における“事情表現”の規定因 心理学研究, 62, 164-171.
- Olson, D. R. & Astington, J. W. 1986 Children's acquisition of metalinguistic verbs. In W. Demopoulos & A. Marras (Ed.), *Language learning and concept acquisition: foundational issues*. Norwood, N.J. Ablex. pp.185-197.
- Rempel, J. K., Holmes, J. G., & Zanna, M. P. 1985 Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 95-112.
- Robinson, E. J., Goelman, H., & Olson, D. R. 1983 Children's understanding of the relationship between expressions (what was said) and intentions (what was meant). *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 75-86.
- Rotenberg, K. J. 1980 "A promise kept a promise broken": developmental bases of trust. *Child Development*, 51, 614-617.
- Rotenberg, K. J., & Pilipenko, T. A. 1984 Mutuality, temporal consistency, and helpfulness in children's trust in peers. *Social Cognition*, 2, 235-255.
- Schlenker, B. R., Helm, B., & Tedeschi, J. T. 1973 The effects of personality and situational variables on behavioral trust. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 419-427.
- Searle, J. R. 1969 *Speech act: an essay in the philosophy of language*. Cambridge England: Cambridge University Press.
- Selman, R., & Byrne, D. B. 1976 A structural developmental analysis of levels of the taking in middle childhood. *Child development*, 45, 803-806.
- Shatz, M., Wellman, H. M., & Silber, S. 1983 The acquisition of mental verbs: a systematic investigation of the first reference to mental state. *Cognition*, 38, 1-12.
- 鈴木敦子 1993 幼児における約束の概念の理解 教育心理学研究, 41, 143-151.
- 鈴木敦子 1994 幼児における約束の理解(Ⅱ) —約束における責任の理解— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 107-108.
- 鈴木孝子 1987 幼児の情報理解における整合性の吟味と文脈予期 教育心理学研究, 35, 132-140.
- 玉瀬友美 1994 幼児における心的世界の理解 教育心理学研究, 42, 334-344.
- 山岸明子 1980 役割取得能力の発達に影響する社会的経験の検討「役割取得の機会からの観点からの分析」 心理学研究, 52, 289-295.